

UTCP International Symposium

“The possibility of making Japanese philosophy as an academic discipline”

The University of Tokyo
August 2, 2010

Place

Collaboration Room 3, 4th Floor, Building 18, Komaba Campus

Program

13:00 Opening Remarks /Yasuo Kobayashi(UTCP)

13:10-14:30 Session 1

1. **Critique and Morality: Claude Lévi-Strauss and Katsumi Umemoto**

Takahiro Nakajima(UTCP)

2. 疎外された歴史と道德の問題：梅本克己の自由論をめぐって

Viren Murthy (University of Ottawa)

14:40-16:00 Session 2

3. **Writing on Commercial Society: The Rhetorical Philosophy of Kaihō Seiryō**

Makoto Tokumori (University of Tokyo)

4. **Educating Rita --- the case of Japanese Philosophy**

Ching-yuen Cheung (The Chinese University of Hong-Kong)

16:00-16:20 Coffee Break

16:20-17:40 Session 3

5. **The making of “Japanese philosophy”： Nakae Chōmin, Nishi Amane and Nishida Kitarō**

Wing-keung Lam (The Hong Kong Institute of Education)

6. 日本における「はじめの哲学」—— 西周の「哲学」をめぐって

Nobuo Takayanagi (Gakushuin University)

17:40-18:15 Discussion

Abstract

Critique and Morality: Claude Lévi-Strauss and Katsumi Umemoto

Takahiro Nakajima (Univ. of Tokyo)

Umemoto Katsumi (1912-74) was a Japanese Marxist who was famous for his involvement in the postwar Marxist debate on “Subjectivity.” In his debut of academism, Umemoto wrote a paper on Buddhism in which he stressed “an ideal of Morality.” He continued to accelerate this ideal in the debate on “Subjectivity” from his unique Marxist perspective. He was regarded to claim the “ethical subjectivity.” We have to ask a question here: how is Umemoto’s position different from Watsuji Tetsuro’s Ethics? We can say two things. One is that Umemoto’s ethical subjectivity has a criticism against State, whereas Watsuji’s Ethics does not have it. Another is that Umemoto tried to find a fundamental “relationship” with Nature that is much deeper than the “relationship” with human beings. In this respect, Umemoto can be overlapped with young Claude Lévi-Strauss who also tried to find a deeper “relationship” with Nature.

疎外された歴史と道徳の問題：梅本克己の自由論をめぐって

ムーティアー・ヴィレーン (University of Ottawa)

戦後日本の思想史の主体性論争はこの十年で特に注目を集めるテーマになっている。例えば Victor Koshmann の『革命と主体性』においては、特に戦後のマルクス主義者の議論に焦点を当て、梅本と戦後日本のマルクス主義者の主体性論の欠点は、彼らはいつも主体の外から主体の意味を定めているがために、最終的には、主体性そのものが喪失してしまう危険を孕んでいると述べている。つまり、梅本は伝統的なマルクス主義者のように、ある超歴史的な叙述や枠、あるいはメタ歴史的な枠を持って主体性に意味づけるので、梅本の議論は主体性の可能性を打ち消してしまうと主張しているのである。Koshmann はその問題、いわば、メタ歴史的の枠の問題は、戦前と戦後のそれぞれの知識人の思想を支配していたという結論を導き出した。ここで Koshmann が批判しているのが、正に梅本の道徳概念である。なぜなら、道徳の概念自体は普通にメタの立場を立てて、そのメタの視点から現存社会や行動を批判するからである。換言すれば、道徳はある程度、現在からの距離が必要なのである。梅本の困難は無論、このメタの立場と歴史的唯物論をどう繋げるかということにある。実は Koshmann が言ったように、歴史的唯物論は普通に道徳を否定しても目的論やテーロス (Telos) を持って歴史の方向性を定めようとしている。つまり、歴史は当然に社会主義の方向へ進めるという結論を出して、社会主義への戦いの合法性を守るのである。Koshmann は Ernesto Laclau

と Chantalle Mouffe の影響を受けて、梅本の道徳的なマルクス主義と科学的な唯物史観とを同時に批判したが、その批判の前提は歴史が構造も道徳も持ち合わせていないということなのである。同じような前提をもって、Rikki Kiersten は梅本を修正主義者 (Revisionist) として解釈し、梅本の貢献はマルクス主義の外にあると論じた。ただ、上に述べた前提は自明ではない。本文は梅本の道徳論と自由論をめぐって、彼の議論の歴史性を改めて討論する。特に梅本自身は歴史、道徳と自由をどのように理解していたかという問いを中心に討論して、その理解を如何に資本主義の歴史と繋げるのかということに問うことにする。梅本の議論自身はある程度、同じような話題をだしている。つまり、彼の道徳についての議論は資本主義を克服するための理論的基礎として展開していた。その展開はまた、梅本と京都学派の西田幾多郎と田辺元のそれぞれの議論の相違を討論する必要があることを示唆している。Koschmann が言ったように、日本の戦前と戦後思想は連続しているが、本文は戦前の京都学派と戦後の梅本というようなマルクス主義者のそれぞれの議論を、疎外の問題への抵抗として理解しようとしている。また、その疎外を資本主義と繋げようとしている。梅本は資本主義の歴史と、疎外の問題を切り離せないものであるとし、彼の道徳についての議論はこの両方の問題を克服するための議論として理解できるのではないかと考えられるのだ。もし、その道徳は歴史の外ではなくて、歴史の内から生じているとすれば、梅本の議論は今でも深い意味を持っているのではないかと推察することが出来よう。

Writing on Commercial Society: The Rhetorical Philosophy of Kaihō Seiryō

Makoto Tokumori (University of Tokyo)

I would like to consider philosophy in the late 18th century Japan through a close analysis of the writings of Confucian scholar Kaihō Seiryō (1755-1817). His texts not only reflect the social and cultural changes of that time produced mainly by the prevailing commercial relationships, but also show his intellectual challenge to understand and manage such social conditions because he thought moral principles were no longer effective to do so. I would like to explore his attempt with attention to his enthusiasm for writing and rhetoric as the key.

Educating Rita --- the case of Japanese Philosophy

Cheung Ching-yuen (The Chinese University of Hong-Kong)

Last year I delivered a course on “Japanese philosophy,” which is believed to be the first university course on Japanese philosophy offered in Hong Kong. The content of this course covers from traditional Japanese thoughts (Buddhism, Confucianism, Shinto/Native studies) to

modern academic philosophy (Nishida, Watsuji, Kuki, etc.). In this paper, I shall discuss the difficulties in teaching Japanese philosophy as a discipline, and share the experience of learning the meaning of Japanese philosophy from one of my students.

The making of “Japanese philosophy”: Nakae Chōmin, Nishi Amane and Nishida Kitarō

LAM Wing-keung (The Hong Kong Institute of Education)

This paper attempts to examine how “philosophy” is being philosophized in Japan, with a focus on three Japanese thinkers, namely, Nishi Amane (1829-1897), Nakae Chōmin (1847-1901), and Nishida Kitarō (1870-1945). By translating the Greek origin term, “philosophy”, with two ideographs, 哲学 *tetsugaku*, it indeed does not confine to an “assimilation” of “Western” philosophy, but also entails a “dissimilation” in line with the other intellectual traditions, Confucianism for instance. In 1901, however, regardless of Nishi’s innovating terminology, *tetsugaku*, Nakae Chōmin claimed that there is no “philosophy” in Japan, arguing that the scholarships of Confucianism and Buddhism in Edo period, and Western philosophy in early Meiji were merely repetitions of the ancient traditions and Western learning respectively, in which they did not entail a kind of “uniqueness”. Not until Nishida Kitarō, whose idea of *basho* 場所 publicized in 1926 was recognized by Sayūda Kiichirō as “Nishida Philosophy”, claiming that it embraced an “unique system”, Nakae’s criticism seemed to be valid. Our concerns are: why and how Nishida would come up his own “unique” philosophy fifty years after Nishi’s introduction of philosophy to Japan? Should the logic of *basho* be considered as the birth of “Japanese philosophy”? What does it exactly mean for the term “Japanese philosophy”, how “Japanese philosophy” is established and what potentialities does it carry, especially in line with the above three thinkers?

日本における「はじめの哲学」—— 西周の「哲学」をめぐって

高柳信夫 (学習院大学)

西周 (1829~97) は、日本における「哲学」という訳語の創出者であり、日本で最も早い時期に「哲学」の重要性を自覚的に主張した人物であることは、よく知られている。しかし、その後の日本の「哲学」界において西の「哲学」がどのように位置づけられていたかといえば、たとえば、桑木巖翼 (1874~1946) が「西周の哲学」(1942)の中で、1874年の『百一新論』の発表を契機に「哲学」という語が世に行われるようになった件について、「その際の用語は全然今日の意義と一致すると言い難い点もないではないが、

しかしながらもとよりこれを全然別種のものとする事は出来ないから、ここに歴史的発達の跡を辿ることもまた不可能でない筈である」（『日本哲学の黎明期』、書肆心水、14～5頁）と、いささか歯切れの悪い言い方をしていることからもうかがわれるように、西以後の日本の「哲学」者にとって、西の「哲学」は、彼ら自身の「哲学」の系譜的な先行者とは言い難い、いささか孤立した存在としてイメージされていたように思われる。

そのような理由もあつてか、そもそも西周の「哲学」がどのようなものだったかという点は、現在にいたるまで必ずしも明確になっていない。もちろん、それは、西が自身の「哲学」について語った資料がさほど多く残されていないためでもあるが、同時に、西の「哲学」についての先行研究の多くが、西の「哲学」そのものよりも、西洋流の *philosophy* が西によっていかにして日本に導入され、「哲学」という訳語がどのようにして確立したか、さらに、その際に、西の基礎的教養を構成していた儒教的な諸要素（朱子学や徂徠学）がどのように影響したか、といったことを主要な関心としていることにもよる。よって、西周が自身の「哲学」をいかなるものとしてイメージしていたかという基本的事項を改めて検討することは、未だに一定の意味を持ちうるであろう。

西周は、『尚白筭記』（1882）において「凡ソ百科の學術に於ては統一の觀有る事緊要たる可し」としているように、諸科学を貫通する「統一の觀」の必要性を強調した。さらに、『生性發蘊』（1873）の中で G・H・ルイス（Lewes）の *A Biographical History of Philosophy*（1857）の一部を翻訳した部分に、諸科学の専門分化が進行しつつある時代においては、様々な専門科学を統轄する「統一ノ觀」を「哲学」によって確立する必要であり、さらに、諸科学はそれを統轄する「哲学」の一部となるものである、と論じられていることから見て、西の考える「哲学」は、狭義には、諸科学を統一する原理を与える学、広義には、統一された諸科学全体を指していたと思われる。そして、西は、ミルやコントの影響を受けつつ、独自の「統一科学」の確立を目指してゆくことになるが、西の「統一科学」の確立という目標は結局挫折し、未完成のままに終わった。このことは、彼は自身の「哲学」を確立することに最終的に挫折したことをも意味するが、その挫折の原因の中にも、西のいう「哲学」の特質が見出せるであろう。

以上の点をふまえた上で、今回の発表では、近代中国において、ミルやスペンサーの影響を受けつつ、ある意味で西と類似した「諸学の統一的体系」を構想した嚴復（1854～1921）との比較も行いながら、西周の「哲学」のあり方を探ってゆくこととしたい。